

総合地理研究会と皇戦会—初期地政学グループの活動—

The Early Phase of Japanese Geopolitik School: The Relation between the Sogo-chiri-kenkyukai and the Kosenkai

久武哲也(甲南大学[故人])・鳴海邦匡(大阪大学)・石橋諭(大阪大学・院)・小林茂(大阪大学)*

HISATAKE Tetsuya (Konan University), NARUMI Kunitada (Osaka University),

ISHIBASHI Satoshi (Grad.Stud., Osaka University), and KOBAYASHI Shigeru (Osaka University)

キーワード：地政学、戦争、軍、総合地理研究会、皇戦会

Keywords: Geopolitik, War, Military, Sogo-chiri-kenkyukai, Kosenkai

演者らは、これまで外邦図の研究に従事し、その過程で近代地理学と戦争、あるいは地理学者と軍隊の問題に関心をふかめてきた(『外邦図研究ニューズレター』1~4, 2003~2006)。とくに今日大学に所蔵されている外邦図の来歴を追跡するうちに、第二次世界大戦末期に参謀本部を中心に組織された「兵要地理調査研究会」の活動について、元大本営参謀、渡辺正氏が所蔵されてきた資料を検討することとなった(渡辺正氏所蔵資料集編集委員会 2005)。この研究会は、東京在住の地理学者を中心に、兵要地誌的な調査・企画業務をおこなった臨時委員会とでもいうべきもので(久武, 2005)、日本本土での連合軍に対する戦争にそなえて地理的情報を整備することを主目的としていた。またこの研究会には、京都大学を中心とする地理学者も参加していたが、彼らは他方で「総合地理研究会(総合地理研究会)」を組織し、軍との関係を別のかたちで強化していたことはよく知られている。地政学を標榜し、イデオロギー的な活動もおこないつつも、並行して秘密の調査・企画活動を続けていたのである。

この二つの「研究会」についてはなお検討すべきことが多いが、主要な一次資料が刊行された「兵要地理調査研究会」に対して、とくに「総合地理研究会」については、活動の全容を示す資料はまだ発見されているとはいえ、組織や財政基盤、さらには軍との関係などについて多くの不明な点がこのこされている。京都大学・大学文書館に最近架蔵されることになった室賀信夫氏の個人資料は、「皇戦会関係書簡」(1939-1942)、「総合地理研究会関係原稿」(1939-1940)、「皇戦地誌に関する意見」(1940年)をふくみ(松田 2005)、これらにアプローチする手がかりを提供している。本発表では、その予察的な分析の結果を紹介する。

1. 室賀信夫氏の個人資料 故室賀信夫氏(1907-1982)は、京都大学地理学教室の講師、助教授をつとめ、1946年の辞職後も地理学史の研究に従事した。その古地図、地理学史関係コレクションは、現在京都大学図書館に架蔵されている。これに対し上記資料が含まれる個人資料は、講義録や書簡、論文別刷り、原稿、ノートなどで構成されている。演者らが閲覧し検討を開始しているのは、そのうち書簡と原稿で、従来知られていなかった初期の総合地理研究会の活動および皇戦会との関係を示している。

2. 皇戦会 皇戦会は、陸軍将校高嶋辰彦(1897-1978)が組織した団体で、参謀本部嘱託が職員となっていた「国防研究室」と密接な関係をもち、とくに仲小路彰(1901-1984)を中心とする著作活動と小牧実繁(1898-1990)らの地政学グループの活動を援助したとされている(藤田 1981)。その開始は1939年という(野島 2006, 304)が、さらに検討の余地がある。仲小路らは戦争文化研究所から雑誌『戦争文化』とともに多数の書物を刊行しており、高嶋はこの軍による買い上げを手配するとともに、皇戦会を通じて財政的な援助もおこなっていたと考えられる。また高嶋自身も戦争文化研究所から書物を刊行している。

注目される皇戦会の財政基盤は、地政学グループとの連絡にあたった陸軍将校の間野俊夫によれば、高嶋が大阪・東京の商工会議所の「理事者」に要請し、とくに関西経済界から援助をうけることにより確立された。そのため、大阪商工会議所の理事が皇戦会の監査役になっていた(間野 1981)。また間野によれば、高嶋の意図は「欧米のアジア侵略の意図と戦略をつき、アジア解放の聖戦を強調し、思想戦の強化を計ることにあった」とされる。この意図と総合地理研究会の活動との関係が注目される。なお、高嶋の

著作(1941)を検討すると反ユダヤ的傾向が強い。

3. 皇戦会と総合地理研究会との関係 現在まで閲覧できた室賀信夫氏の個人資料に含まれる書簡の中で、もっとも注目されるのは、上記間野俊夫より1939年7月28日発信と推定されるもので、皇戦会の財政的な基礎が確立されたので、「久しくご不自由をかけし研究費も貴殿に対しては乍些少月額金壹百圓也毎月末に御送附致すことゝ定め」と述べている。これは、それまで研究を依頼しても長期間経費が支払われなかったことを示している。またこの送金は定額であるところから、室賀氏個人にあてた謝金的な性格もあわせもっていたことをうかがわせる。

もう一つ注目されるのは、皇戦会から1940年1月12日に発信された、「皇戦地誌とは如何なるものとなすべきや」について月末までに原稿提出をもとめるもので、これに対応して、1月27日にひらかれた研究会のメモもみられ、柴田孝夫はじめ、関係者の意見が簡略に書きとめられている。「通称『吉田の会』による地政学関連史料」(『空間・社会・地理思想』6, 59-112, 2001)に収録された「皇戦地誌に関する意見」(74-89, 1940年)は、あきらかにこれによって作製されたもので、依頼に応じて各種レポートが提出されたことがあきらかである。他の関連原稿でも、こうした依頼をメモしているものが一部みとめられる。

その他の書簡で注目されるのは川上健三からのもので、彼が総合地理研究会と皇戦会のあいだを調整しており、その京都側の窓口は室賀氏であったことがあきらかである。

さらに関心を引くのは、提出されたレポートの内容が、参謀総長はじめ陸軍の幹部に対し、高嶋や川上によって紹介されたことが報告されている点である(1940年1月30日発信および同2月22日発信)。これらでは高嶋がレポートの内容を高く評価したことが強調されている点も留意される。

このような点からすると、このころの総合地理研究会の役割は今日でいえばシンクタンクのようなものであったことが推測される。上記1940年1月30日発信のものである、室賀氏の「印度支那半島侵略史」(これはあきらかに上記「通称『吉田の会』による地政学関連史料」に収録された、「印度支那半島に於る英佛の侵略とその政策」1939年12月[67-73]に対応している)が紹介されたことが報告されている。インドシナへの進駐が意識されていた当時は、軍事情報以外にこのような歴史叙述も求められていたこ

とを示すといえよう。

4. 今後の研究に向けて 以上室賀氏の個人資料に含まれるいくつかの書簡や資料の検討結果を示した。すでに上記「通称『吉田の会』による地政学関連史料」が刊行されているとはいえ、これらは資料が作製された状況や経過に関する情報を欠いており、またそのことは解題(水内2001)にも反映している。室賀氏の個人資料にみられる書簡や原稿、メモは、こうした情報を提供するだけでなく、活動資金の出所、それに対する軍関係者の思惑など言説分析をこえる内容をもっている。この点で、さらに整理と分析をくわえる必要があろう。

これに向けて、とくに必要なのは、すでに松田清京都大学教授によって準備されている資料目録をさらに精緻なものとし、関係資料の全容を把握するだけでなく、それをクロノロジカルに整理し、画期を検出して、重要なものについては刊行していく必要があろう。それによって、久武(2005)がこころみた二つの研究会の特色の把握を深化させるとともに、すでにおこなわれている小牧実繁の著作の分析(柴田2006)についても、その形成に於ける室賀氏の役割など、重要な局面に迫ることができると考えられる。

末尾になるが、資料の閲覧に便宜をはかっていただいた、松田 清先生・西山 伸先生(京都大学)に感謝したい。

文献

- 柴田陽一 2006. 「小牧実繁の『日本地政学』とその思想的確立」『人文地理』58, 1-19.
- 高嶋辰彦(1941)『世界史の真相』陸軍士官学校記事編集部.
- 野島芳明 2006. 『昭和の天才仲小路彰』展転社.
- 久武哲也 2005. 「『兵要地理調査研究会』について」渡辺正氏所蔵資料集編集委員会編『終戦前後の参謀本部と陸地測量部』大阪大学文学研究科地理学教室, 5-19.
- 藤田 清 1981. 「皇戦会と高嶋さん」森晴治編『雪松・高嶋辰彦さんの思い出』森晴治(福岡市), 36-42.
- 松田 清 2005. 「室賀信夫氏個人資料の寄贈」『京都大学大学文書館便り』8, 5-6.
- 間野俊夫 1981. 「高嶋さんと総力戦」森晴治編『雪松・高嶋辰彦さんの思い出』森晴治(福岡市), 70-75.
- 水内俊雄 2001. (解題)「通称『吉田の会』による地政学関連史料」『空間・社会・地理思想』6, 59-63.
- 渡辺正氏所蔵資料集編集委員会 2005. 『終戦前後の参謀本部と陸地測量部』大阪大学文学研究科地理学教室.

総合地理研究会と皇戦会 —初期地政学グループの活動—

久武哲也(甲南大学[故人])
鳴海邦匡(大阪大学)・石橋諭(大阪大学・院)・
小林茂(大阪大学)

1

外邦図研究

外邦図の作製過程へのアプローチ
外邦図の目録作製:東北大・京大・お茶大
終戦から戦後の外邦図の移転と収蔵過程の
研究
兵要地理調査研究会の役割が大きい

→『終戦前後の参謀本部と陸地測量部:渡辺正
氏所蔵資料集』の刊行(2005)

2

兵要地理調査研究会

1944年12月～1945年1月に大本営参謀、渡辺正
少佐より多田文男東大助教授組織化の打診
辻村太郎・田中啓爾など関東の地理学者が中心
京大の地政学グループも参加
日本本土での連合軍に対する戦争にそなえて地
理的情報を整備することを主目的としていた

久武哲也(2005)『『兵要地理調査研究会』について』

3

総合地理研究会(総合地理研究會)

京大の小牧實繁(1898-1990)・室賀信夫(1907-1982)を中
心とする

1939年3月に発足(『総合地理研究会趣旨』1940)

京都大学の近くの吉田に民家を借りて研究資料を蓄積
1945年8月以降に解散

活動の内容はよく知られていない

村上次男(1999)『日本地政学の末路』……唯一の当事者
の証言、ただし村上は1942年春以降に総合地理研究会
に参加→初期の活動はとくによく知られていない

4

室賀信夫氏の個人資料の 京大文書館への収蔵

室賀氏の資料

1. 古地図・地理学史関係資料(室賀コレクション)→京大図書館
2. 個人資料→京大文書館に収蔵、目録の作成
地政学講演原稿(1943)／総合地理研究会関係原
稿(1939-40)／皇戦地誌に関する意見(1940)など

松田清(2005)『室賀信夫氏個人資料の寄贈』 Kyoto U.
Archives Newsletter, 8, pp. 5-6.

5

皇戦会

陸軍将校高嶋辰彦(1897-1978)が組織した団体

①仲小路彰(1901-1984)を中心とする活動(戦争文
化研究所による著作・出版活動)

②小牧実繁らの地政学グループの活動
を援助した

資金は関西財界から

その理念:「欧米のアジア侵略の意図と戦略をつき、
アジア解放の聖戦を強調し、思想戦の強化をは
かる」

藤田清(1981)『皇戦会と高嶋さん』／間野俊夫(1981)『高嶋
さんと総力戦』

6

高嶋辰彦の略歴

1997年生まれ
1918年陸軍士官学校卒業(銀時計下賜)
1925年陸軍大学校卒業
1936年参謀本部部員
1937年内閣情報部情報官その後すぐに大本営陸軍参謀
第一部戦争指導班班長
1939年参謀本部戦史、総力戦研究課長
1940年12月台湾歩兵第一連隊長
1941年第十六軍(ジャワ攻陥)高級参謀兼第三艦隊参謀
1943年第三軍(在満州牡丹江)参謀長
1944年12月第十二方面(東京)軍参謀副長、のち参謀長
「年譜」(森晴治編『雪松 高嶋辰彦さんの思い出』1981)

7

皇戦会と総合地理研究会

総合地理研究会より皇戦会にレポートを提出
皇戦会より資金援助
両者のあいだには間野俊夫(陸軍将校)と川上
健三(京大地理1933年卒)が介在
川上は藤田清とともに参謀本部嘱託として
「国防研究室」(青山四丁目)に勤務。これが
廃止され、1942年3月に「総力戦研究所」嘱託
となる
室賀資料の川上健三書簡(1942年2月4日など)

8

総合地理研究会のレポートと皇戦会

総合地理研究会のレポートは、高嶋や川上が内容を
参謀本部の幹部に紹介

川上書簡(1940年1月31日など)

その内容

すでに一部が「通称『吉田の会』による地政学関
連資料」(2001年)に紹介されている。

現地の情報にもとづいた軍事的なレポートある
いは国際関係の理解にもとづいた戦略的な提言と
いうより、歴史的経緯や立地の説明

その一例→日本軍の南部仏印進駐

9

仏印進駐と室賀レポート

1939年12月「印度支那(半島に)於る英仏の侵略[とその
政策]」(1937年12月起草)→皇戦会

1940年5月23日「『欧州戦乱に対処するタイ国の軍事経
済上の指導概要』への卑見」投函(参謀本部嘱託より
川上健三を通じて依頼)

1940年6月「日泰和親条約の締結と仏印問題につきて」
提出→皇戦会

1940年6月17日、フランスがドイツに降伏

1940年7月「南洋華僑の一考察」→皇戦会

1940年9月23日、日本軍が北部仏印に進駐

1940年12月28日「シンガポールの軍事地理」小牧に提
出→皇戦会

1941年6月18日「西貢港の地政学的位置に就いて」稿了
→皇戦会

1941年7月28日、日本軍が南部仏印に進駐

10

南部仏印進駐の準備と室賀レポート

フランスのドイツに対する降伏(1940年6月)

タイの仏印攻撃(1940年11月)

→両者を調停しつつ、南部仏印に航空基地・海軍基地を設定、ま
たこれを警備する機関の設置を計画(1941年1月に方針決定)

室賀レポート(「シンガポール」・1940年12月、「西貢港」・1941年6
月)は、それぞれ要地の歴史的背景と立地について述べる。ま
た日米開戦を前提としながら、日本中心の南進論の枠組みで
南部仏印進駐の必要性を力説。

南部仏印進駐はアメリカの参戦をうながすという懸念については、
「米国の参戦は米国自身の事情によって決定す」と、その回避
などは考慮しない。

日米関係および日米戦争に関する「地政学」は展開していない
軍の内部からと思われるような秘密情報はほとんど含まれていな
い

アジア歴史資料センター資料「対タイフランス領インドシナ国策決定文書
／1仏印泰処理要項」 RC: B02032438600

11

皇戦会の資金と影響力の低下

高嶋辰彦の台湾転勤(1940年12月)

間野俊夫の総力戦研究所への転出(1942年3月)

→皇戦会に軍人がいなくなり、軍との関係は個
人的なつてをたよって

→皇戦会の資金力も低下(地図作製の費用が
負担できない)

川上健三書簡(1942年10月27日)

→他の資金源の模索

12

総合地理研究会と皇戦会(結論)

1. 最初に訂正: 久武(2005)では総合地理研究会に高嶋らを通じ軍の資金が提供されたとしたが、これは誤りで、このルートでは軍からの直接の資金提供はなかった。
2. 総合地理研究会のメンバーと参謀本部の幹部との直接的な接触は、皇戦会を通じてはなかった。高嶋や川上を介した関係
3. 皇戦会は高嶋個人の尽力によるところが多く、その台湾転動(1940年12月)とともに活動が停滞していった→1942年以降は急速に活動が低下
4. 室賀レポートの位置づけ: 歴史的背景と立地中心の報告で、日本の軍事行動を正当づけるもの
その根拠となった資料はほとんど示されないが、欧米人の研究を広範に参照した可能性がみとめられる。(野間三郎書簡、1939年8月、関沢秀隆書簡、1940年10月)

13

兵要地理調査研究会と総合地理研究会

兵要地理調査研究会

さまざまな大学の関係者、研究者より構成され自然地理学者中心

軍事的に必要と考えられる地理情報の収集と提示

資金(謝金)は直接軍から

終戦直前に臨時的に活動

総合地理研究会

ひとつの大学の卒業生でしめられ、人文地理学者中心

日本の軍事行動を正当づける議論を展開し、その軍事的意義はうすい

資金は民間から

シンクタンク・著述集団として活動

14

外邦図との関係

皇戦会は、総合地理研究会にほとんど秘密の外邦図を提供しなかったと考えられる: 間野俊夫が苦勞して手に入れた南方地図を提供(川上書簡、1942年?月25日) / 室賀よりバンコクでの地図の購入を依頼されたができない(関沢秀隆書簡、1940年10月)

逆に皇戦会が地図の借用を申し入れている(川上書簡、1941年10月8日、1942年?月25日)

→地図が提供されたのは皇戦会以外のルートで?

ただし中国の地図は多色刷りの航空図(村上、1999)

15